

# 教えることを学ぶことについての一考察

—教職実践研究Ⅰの実践から—

内 健 史 [鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター]

## A consideration about learning to teach: Through the education practice of the course “Practical Studies for Teaching I”

UCHI Takefumi

キーワード：教員養成、実践的教職科目、授業分析、学習指導案作成、模擬授業

### 1 はじめに

教職実践研究Ⅰは、「実践的教職科目」群の一つとして2年時前期に実施しており、本年度で6年目の取組となる。この科目では、教師の中心業務である「学習指導」の基本について、学習指導案を作成して模擬授業を行うことにより、学習指導の基本的な力量形成やそのための課題について実践的に学ぶことを目的とし、本年度は18人が受講した。

科目としての到達目標は、本時のレベルの学習指導案を自分の力で書き、それに基づいて模擬授業を行うことであり、具体的には、まず、小中学校における基本的な授業のあり方についての講義や模擬的な授業を受けたりして、学習指導の基礎的・基本的事項を学び、次に、附属学校での授業参観を通して、学習指導のプロに学びながら自分で実際に学習指導案を作成し、そして、作成した学習指導案に沿って模擬授業を行ったり、互いの授業について検討したりして学習指導の基本的なあり方について学ぶという、3つの内容に取り組むこととした。



写真1 小学校国語の模擬授業

本科目で学生が身に付けることを目指す学修目標は表1に示すとおりであり、「授業デザイン力」や「授業展開力」などの学習指導の基本的な力量形成を目指しているが、そのすべてを本科目のみで担えるものではない。しかし、本科目を履修する中で、学習指導の力量形成を図るために必要な要素について学び、自己の具体的な課題や目標を明確にしながらか「自己改善力」を高めていくことは、今後、教育実習等や教科教育及び教科専門の科目をとおしてさらなる資質の向上と力量形成を図る上で必要不可欠であると考えられる。

本稿は、授業参観の視点に関する指導等の本科目における筆者の実践を報告するとともに、それらをもとに学生が実践的に「教えることを学ぶ」ことに取り組む中で大学教員が教員養成のために果たす役割について考察するものである。

表1 本科目の学修目標

- (1) 児童生徒に学力向上を図る授業を目指して、授業前、授業中、授業後の各段階における基礎的・基本的事項（教育課程や指導法の理解等）を身に付けるとともに、1時間の授業を構想し指導案を作成することができる。

【授業デザイン力】

- (2) 「学習指導」に関する力量形成を目指して、自分の課題を明らかにしながら、意欲的に授業参観をしたり、指導案作成を行ったりし、その解決に進んで取り組むことができる。

【自己改善力】

- (3) 学習指導の基礎的、基本的事項についての理解に基づきながら、模擬授業を行ったり、協力して授業研究やその省察を行ったりすることができる。

【授業展開力、協働連携力】

## 2 授業の概要

本年度の全15時間の授業計画は表2に示すとおりである。基本的な内容や流れはこれまでのものと同じであるが、附属小・中学校の研究公開の時期等も踏まえ、授業参観前後の分析、事前研究に十分に時間を取れるようにした。

また、第9回から第14回までは、学生が模擬授業を実施するために選択した教科等(国語、算数・数学、英語、道徳)に分かれて実施した。

表2 授業計画概要

回	主な内容
1	学習指導案とその作成について
2	授業づくりの基本①(目標・内容の構築)
3	授業づくりの基本②(活動や発問・板書の構築)
4	授業づくりの基本③(指導と評価)
5	授業参観の視点とその分析
6	教材研究の進め方①(公開授業指導案の分析)
7	教材研究の進め方②(公開授業の事前研究)
8	授業参観と授業研究(附属小・中学校の研究公開参観)
9	授業観察で学んだことの振り返り・協議
10	学習指導案の検討・作成①
11	学習指導案の検討・作成②
12	模擬授業と授業研究①
13	模擬授業と授業研究②
14	学習指導案作成と模擬授業の振り返り
15	授業づくりと今後の課題

筆者はこれらの計画の中で、第4回の「授業参観の視点とその分析(講義・演習)」を担当し、5人の学生が選択した第9回から第14回の「学習指導案作成と模擬授業(国語)」を他1人の教員とともに指導した。

学生は、各回ごとに気付いたことや考えたこと、今後の課題等を「振り返りカード」やワークシートに記述することで、自身の変容や課題意識を明確にし、把握できるようにしている。また、第1回で「学習指導に関する自己診断(課題チェック表)」を実施し、「各教科等のカリキュラムに関する理解」「教材分析力及び授業デザイン力」「授業展開力及び授業評価力」の3観点15項目について自己の課題を診断する。その後、第7回で中間の診断、最終回でそれまでとの比較を再度実施している。本稿では具体的な取組とともにこれらの各段階に

おける学生の振り返りの記述をもとにテーマに関する考察を行うこととする。

## 3 授業参観の視点について

授業参観については、一人ひとりにその経験の差はありものの学校体験や観察実習、教科教育における学部授業参観等でほとんどの学生が経験済みである。しかし、その際の視点はオリエンテーション等での事前指導があったにもかかわらず、決して明確になっていないという実態があった。また、実際の授業参観においても、どうしても授業を行う教師の指導法や指導内容にのみ目がいきがちなのである。

そこで、筆者が担当した第4回の「授業参観の視点とその分析(講義・演習)」では、学習指導案作成の視点、すなわち授業をデザインする立場で公開授業を参観できるよう、以下の三つのねらいから指導の手立てを工夫した。

一つ目は、教師からの次の三つの「問い」をもとに学生に主体的に参観の観点・視点等を獲得させることである。

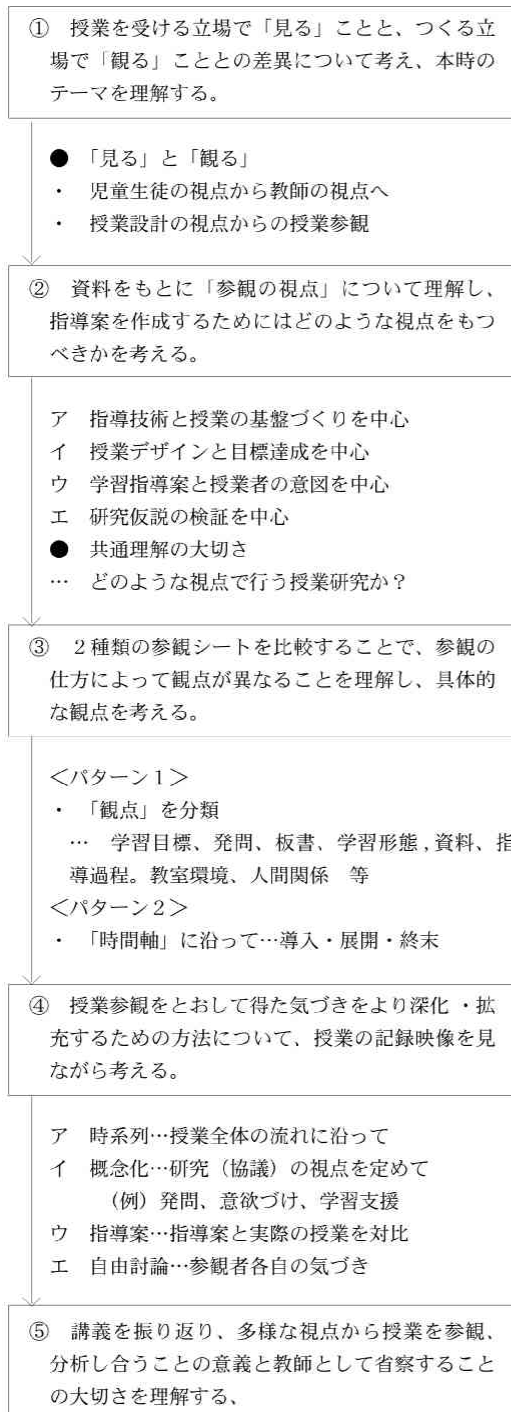
- |                                     |
|-------------------------------------|
| 問① 授業をどのような視点で参観するか？<br>(参観の視点)     |
| 問② 授業のどこを観るか？(参観の観点)                |
| 問③ 授業をどのように参観し、分析するか？(授業参観・授業研究の方法) |

二つ目は、これらの問いに対する自分の考えを文章化して深く追究したり、相互に意見交換しながら考えを拡げたり、批正したりする等の言語活動を通して、必要な知識を受動的に与えられるのではなく、これからの大学における実践的な学びの場で生きて働くものとして獲得させることである。

三つ目は、現場の教員が授業参観や授業参観の際にその質的改善に実際に用いている、内容が異なる複数の資料を提供し、比較させることで、授業参観の視点・観点や授業記録・分析の手法は決して一つではなく、自身のねらいや必要に応じて取捨選択したり、不断の努力によってよりよいものにしていかねばならないことに気付かせることである。

これらのねらいと手だてに基づく具体的な授業の概要は、次のとおりである。

<講義・演習「授業参観の視点とその分析」の実際>



「省察的实践家」… 教師の専門性の中核に

- 自らの実践を多面的に捉える力
- 実践における思考・判断・取捨選択

実際の場面においては、教師からの問いかけや発表や話し合いといった進め方に戸惑っていた学生も、学習が進むにつれ、全員が以下の授業後の感想に伺えるような気づきや知識を得られたようである。

<授業参観における視点・観点の獲得>

- 授業参観の視点は今までぼんやりとしたものであったが、今回の講義でどのような視点を持って参観していくのか、ベースをつかむことができたように感じた。教師としての視点を持って取り組むことが主であったが、生徒、教材との関係性にまで目を向けてできると良いなと思った。今回の視点は今後大切にしたい。
- 授業を参観するときの視点や観点は、いつも分からないまま参加観察や体験学習に行っていました。何を見ればいいのか分からなかったので、とりあえず思ったことをメモしていました。次の授業参観では、少しでも自分の見るべきところをしばって見れそうなのでよかったです。しかし、まだまだ自分の参観の視点を定めることはできていないので、詳しい見方について教えてほしいです。どんなポイントで見たら、授業をする時にどのようにいかせるのか知りたいです。

<自己の課題の明確化と解決への意欲>

- 今日は今まで自分がどのように授業を見てきたかを振り返ることができ、それをふまえた上で、今後の授業を参観していこうと思った。観ることに於いて児童・生徒、教師、教材の関係性は難しいものだなと思ったが、この講義が終わるまでには「自分なりの答えを必ず見つけ出す！」と思った。
- 研究授業を観に行く前に授業を観る上での観点、視点を学べたことはとてもうれしかった。できれば、授業記録をとる練習までできたらと思った。
- 今回の講義で授業をどのような視点でどこを観るか、ということ学びました。今までは発問や板書など見えるところしか見ていませんでした。しかし、これからは、自分でめあてを立て、子どもたちに期待するところへ意図をもって進めていかなければいけません。もっと多くの視点を持って、現場の先生方から学んでいきたいです
- 今まで授業を見ると、発問や板書、先生の振る舞いなど漠然と自分も児童たちと同じように見

ていたなと思いました。これから自分が授業をするために、先生たちのどのような意図やメッセージや込められているのかを今回習った観点から見ていきたいです。

さらに、以下の感想から読み取れるように、筆者は意図していなかったのだが、授業を受ける立場から授業者の教授法や授業展開にまで目を向けた学生もいた。大学教員の授業も学生にとっては一つのモデルであり、学校や教育行政の現場で経験を積んできた立場の者として、これからも意識を高く持ち、学生に示唆を与えられるモデルでありたいと改めて感じる機会となった。

#### ＜教員の教授法からの学び＞

- 先生の講義で、児童生徒自身が「考えること」にとっても大きな学習効果があるということをもっと感じることができた。他の人の意見を多く聞くことで、ただ教わるよりも、より刺激をもらい、納得したり、考えたりすることができると感じた。教え込む教師ではなく、教え導く教師のあり方をもっと深く考えていきたい
- 隣の人とペアになって話し合いをしたりするのは最初は少しやりづらかったが、話し合いや意見の交換を繰り返すことで慣れていくことができた。これは自分が教える立場になっても必要になってくることなので、大切だと感じた。また、先生は自分たちの意見に対していいところを見つけてくれていたので、自分もそのような評価ができるように真似していきたいと思う。

この後、学生は附属小・中学校の研究公開を参観し、そこでの記録や気づきを持ち寄り、各教科ごとに「授業観察で学んだことの振り返り・協議」に臨んだ。学生の授業参観記録は、記録の様式や参観の観点が具体的に示されたこともあり、概ね全員がこれから自身で授業設計をしていく者として具体的な観点から詳細に記録され、自身の気づきも細やかに記述されていた。さらに、筆者が担当した国語科のグループの協議においては、第4回で学んだ授業参観の観点をもとに、整理したり関連づけたりしながら話し合うことで、「教材を読むだけの授業にならないように学習目標を明確にし、授業船体の見通しを持った模擬授業ができるようにしたい。」「児童が主体となって学び、友

達との交流などを通して自分の考えを広め、より根拠のある文章をつくれる授業にしたい。」等、一人ひとりの学生が具体的な授業へのねがいやねらい、そして自己の課題を持つことができた。



写真2 授業参観後の意見交換

#### 4 授業設計（学習指導案の作成）と模擬授業について

各教科グループに分かれて行った国語科の演習・協議等においては、附属小学校の研究公開における二つの授業（1年「はなのみち」、5年「百年後のふるさとを守る」）の学習指導案をもとに学生が選んだ教材の本時案を作成し、模擬授業を行った。その具体的な内容・方法を以下の表3に示す。

表3 教科グループにおける授業計画

回	内容・方法
10	○「学習指導案の検討・作成」① 【演習・グループ討議】 授業の目標と内容・方法の整合性・発問、板書、教具資料等の整備
11	○「学習指導案の検討・作成」② 【演習・グループ討議】 学習指導案のプレゼンと学習指導案の練り直し ・指導案の修正、発問計画・板書委計画の作成、教材資料等の準備 ・教材資料等の準備 ・授業シュミレーション
12 ・ 13	○「模擬授業と授業研究」【演習】 ・模擬授業の実施と相互評価 ・模擬授業の授業研究
14	○「学習指導案作成と模擬授業の振り返り」 【協議】※授業記録ビデオ視聴 ・各模擬授業についての検討（評価できる点と課題） ・授業設計・指導案作成で重要なこと及び

今後の課題  
・指導案の修正

各回ごとに、学生は指導案を作成・修正したり、お互いに検討してアドバイスし合ったりし、担当教員は具体的な作成・指導方法や、授業をデザインしたり展開したりする上で必要となる手法や知識について、全体の流れや個の実態に応じて指導した。しかし、教育実習で学習指導案を作成したり授業を行うという経験がまだない学生にとっては、大変時間がかかり困難を伴う学習活動であった。

そこで、各担当は学生にオフィスアワーを活用して講義と講義の間に次回に向けた個別指導を受けさせるようにした。当初は計画どおりに模擬授業を実施できるようにすることが主なねらいであったが、3、4回（各1時間程度）の個別指導を重ねる中で、双方に大切な気づきや変容があったように感じている。それは、対話や問答、指導案の修正等を重ねる中で、改めて講義の中だけでは得られない、その学生の特性や実態に応じた教材への向き合い方や授業デザインの方法が明確になっていったということである。教員側は、事前にこれだけは身に付けてほしい、このような方法で教えたいといった見通しを持って指導に臨むが、学生が授業デザインや授業展開について持っている意識や知識、力量や意欲・関心は実に多様であり、教員と学生が一对一で向き合って適切に指導したり示唆を与えたりするという時間は、本実践のねらいを達成する上で必要不可欠であると感じた。

以下は、各回ごとの振り返りを通して、学生が授業デザインや授業展開について考えを深め、意識を拡げた一例を示す。

<学生Aの意識の変容>

#### ① 学習指導案作成

指導案を作成して考えたことは、学習のめあてを明確にし、そこに達するにはどのような段階をふまえたらいかが考えていくことが大切だということだ。学習者が能動的に授業を受けることができるように板書や発問の計画を立てていきたい。

#### ② 模擬授業（評価）

2人の模擬授業から参考になる点がたくさん見つかった。例えば板書は見るだけで授業の内容がイメージできるものであるべきだし、学習者への

かわり発言をしっかりと受け止めて応答することが大切だ。来週に生かしていきたい。

#### ③ 模擬授業（実施）

時間配分がうまくいかず、自分のやりたい部分まで行き着けなかった。でも、次につなげる経験となった。また、学習者との対話や声かけなどもっと重視していきたいと思った。

#### ④ 振り返り①（教科グループ）

他の人の授業を改めて観て、良い点や真似したいと思う点をたくさん見つけられた。また、自分の模擬授業の映像を見て、これまで気付かなかった点もわかったし、他の人が良いと感じられる点もあったので今後に生かそうと思った

#### ⑤ 振り返り②（全体）

他の教科のグループの人ともうまくいかなかった点を中心に話し合った。私は授業のシミュレーションが不十分だったのが一番の反省点だった。授業は流れが全てではなく、それを受けている子どもたちがいるということを意識した上で、発問や板書、声かけなどを計画することがとても大切だと学んだ。

これらの文章からも読み取れるとおり、学生が授業デザインや授業展開に必要な力を身に付けるためには、知識や方法を伝達するだけでなく、教えるプロとし必要な力を身に付けていくために他者と協働しながら学ばせていくことが重要であると考える。



写真3 模擬授業の板書を前に

## 5 「教えることを学ぶこと」についての考察

これまで、教職実践研究Ⅰにおける具体的な取組や学生の感想等とおして、教師の中心業務で

ある「学習指導」の基本について、学生が授業参観や学習指導案作成・模擬授業を行う中で、学習指導の基本的な力量形成や自己課題について実践的に学ぶために教員はどのようにかかわればよいかを考えてきた。

筆者が学習指導の力量形成について考える際にその姿が浮かぶ、これまで学校現場であった教師たちがいる。それらの指導のスタイルやパーソナリティは多様であるが、共通しているのは、自他の授業への確かで豊かな見方と、そこでの学びを広く深く他者と共有しようとする態度、そして、他者のアドバイスや気づきを柔軟に受け入れながらも、日々の研鑽と研修、深い教材研究に裏打ちされた授業へ対する確固たるねがいや確かで多様な指導の手だてを持っているということである。

これまで筆者は、教諭として、指導主事として数多くの教育実習生や現場の先生方と接し、授業を参観したり指導助言を行ったりする中で、確かな教員としての力量形成を図るためには、教員養成の段階で身に付けるべき知識・技能があり、大学段階でそれらについての指導がなされるべきあると感じていた。その思いは今も変わらないが、今回、実践的教職科目に携わる中で、未来の教員を目指す学生が、質の高い教育実践を行っている教員たちの教え方に学び、実践することの意味を見いだしながら、自身の取組を批正しつつ振り返る取組を積み重ねて成長していくことの大切さを実感した。

今回の実践は学生どうしでの模擬授業の取組であったが、教育実習での授業、さらに教育現場での授業となると、目の前には多様な学習者の実態があり、そこでは複雑な授業の要素を実感しながら、学習者のコミュニケーションを組織したり、教師と学習者、または学習者どうしの認識を共有できるようにしたりするなど、さらに高度な能力や姿勢が求められる。

教員養成の場において学生たちが「教えることを学ぶこと」に、教員としてどうかかわればよいかということは実に奥が深く、答えを出すのは容易なことではないことを日々実感しているが、本実践とこの考察を出発点として、未来の教員の養成に取り組んでいきたい。

#### 【参考文献】

- 秋田 喜代美・佐藤 学 編著 (2010)「新しい時代の教職入門」 有斐閣
- L・ダーリング-ハモンド&J・バラッツ-スノーデン編 秋田 喜代美・藤田 慶子 訳 (2009)「よい教師をすべての教室へ」 新曜社
- 木村 優 (2013)「授業参観の『視点』と授業分析の『ねらい』-一つの『型』を越えて-」、『福井大学 教師教育研究 Vol.6』pp239-246